

知価革命

工業社会が終わる
知価社会が始まる

堺屋太

堺屋太一

知価革命

工業社会が終わる
知価社会が始まる

「次なる社会」の全体像を求めて——序にかえて

「これからの世の中は大きく変わる」という人は多い。だが、「このように変わる」と明確にいう人は、日本にも外国にも少ない。

「変化の予告はあるが予測はない時代」といわれる由縁である。

未来について述べた書物はある。あり過ぎるほどあるといつてよい。コンピュータ・コミュニケーションの発達した未来社会を描いたもの、バイオテクノロジーや新素材の可能性を書いたもの、金融の自由化と国際化の影響について述べたもの、高齢化社会を予想したもの、資源エネルギーや食糧についての予測、発展途上国の人口爆発や地球上の土地の砂漠化に焦点を当てた二一世紀の姿、果ては「太平洋の時代」を謳う楽観的将来図まで、あらゆる分野の未来に関する書物が巷にあふれている。そう、「あらゆる分野の」であり、統一的・体系的な社会全般を展望した未来予測ではない。

社会的なでき事というのは、試験管での実験のように、他に影響することなく起り、かつ終るものではない。もし、ある社会的・経済的事件が、他に全く影響することのないものであったとしたら、それがどれほど革命的な事件であっても大して重要ではないだろう。社会的・経済的現象の何よりの特性は、「すべてがすべてに影響し合う」ことである。それ故、未来の予測とは、究極的には全社会的な変化を体系的に考察したものでなければならない。そうしたものが、今は欠けている。

もう十年も前に、ダニエル・ベルは「脱工業化社会」の到来を予告した。工業社会が終りに近づいていることを予告した点でその業績は偉大だ。だが、そのあとに到来する「脱工業化社会」についての予測は欠けていた。「犬のあとには犬でないものが来る」といったに過ぎない。

その後、アルヴィン・トフラーは、現在起りつつある変化を、農耕の導入と産業革命に次ぐ「第三の波」と呼んで、社会の根本的変化の近いことを予告した。だが、変化の大きさを強調するに留まり、変化の結果についてはまだ述べていない。

マリリン・ファーガソンは、あらゆる分野に起りつつある現在の変化が、今まさに結合して、社会規範を変化させる「アクエリアン革命」^{ユニズ・ド・ラ・シエ}になろうとしていることを指摘した。しかし、彼女も、変化に対応し得る人間の能力について述べ、変化に育える人々を勇気付けようとしたに過ぎない。

実際、これからはじまる未来社会を事前に予測するのは、多くの危険を伴う困難な仕事だ。特にそれが、これまでの社会と全く違った新しい社会であるのなら、完全な予測は不可能といってよい。ヘーゲルがいったように「真理は後姿でしか確認できない」ものに違いない。

しかし、完全ではないにしても、何らかの手懸りになるような未来の予測は、やっぱり欲しい。いや、必要であるだろう。本書は、そうした前提で、可能な限り総合的かつ体系的に未来の社会を予測しようとする試論である。勿論、これには多くの批判や反論が出るだろう。私はそれを、むしろ期待している。これまで試みられなかった総合的・体系的な未来社会の予測について議論が盛り上げられ、より完全な予測に接近することになると思うからである。

私の専門は経済である。この経済の分野で重大な変化が起り出したことに気付き、そのための理論

と觀察手段の必要を感じたのは、もう十年あまりも前になる。その契機は、産業構造と就業構造における第三次産業の高まりであつた。こうした現象を分析するのに、現在の経済学理論と経済統計はいかにも不備に思えたのだ。

やがて、この第三次産業の拡大現象は、「モノ離れ」とか「経済のソフト化」と名付けられた。だが、現象に名称を付したことで問題が解明されるわけではない。むしろ、そう単純に記号化してよいかという疑問さえ起る。この問題の解明には、最終財の形状や産業構造を論じるだけでは済まされないものがある。従つて、私の問題意識は価値論に向かわざるを得なかつた。

しかし、これはより困難を拡大するだけだつた。現代経済学の価値論は、いずれも第三次産業的価値について答えるものではないからである。

私の趣味は歴史と建築である。当然のように、私は古代に遡つて「価値」の意味を模索する氣になつた。二〇世紀の経済学があまりにも輕視して來た分野である。

この仕事は、ごく自然に文明論に行き着く。そしてそれぞれの時代と地域の文明の差違の根源を探ることにもなる。

私が「豊富なものを沢山使うことを格好よいと感じる美意識と不足なものを節約するのは正しいことだと信じる倫理観」とを育てる人間の「やさしい情知」についての仮説を立ててみたのはこの結果である。私はこのことを数年前からいくつかの小論文では書いて來た。だが、それをまとまつた書物にすることはためらつた。あまりにも遠大な問題を浅薄な知識と偏見に満ちた断定によって書くべきではないと考えていたからだ。

しかし、八〇年代に入ってから世界の経済と社会の動きは、かなりの程度の確信を私に与えてくれた。特に一九八三年以降の動向は、景気下降局面ばかりでなく、上昇局面においても、従来と様相が違って来ていることを教えてくれた。ちょうどそんな時、P H P 研究所の江口克彦氏の熱心なお勧めと小川充氏の驚異的な御尽力をいただいたことが、この執筆の決断につながった。

本書の目的は、次なる新社会「知価社会」について総合的・体系的な予測を示す点にある。そのために多くの紙幅も割いた。だが、本書の標題は『知価革命』とした。それは「知恵の値打ち」が経済の成長と資本の蓄積の主要な源泉となる知価社会を創り出す技術、資源環境および人口の変化と、それによって生じる人々の倫理観と美意識の急激な変化全体がもたらす社会の大変革を指している。あえてこれを標題にしたのは、それこそが今、この一九八〇年代に起っている事態だと思ふからである。

繰り返していうが、本書は遠くはない未来にはじまるであろう次なる社会「知価社会」の予測であり、「知価社会」が良いか悪いかを論じるものではない。まして「知価社会」を意図的に創ることをすすめるものでもない。だが、好むと好まざるとにかかわらずやって来るであろう「知価社会」に、各個人とその集団が、上手に対応するためには、早くかつ総合的に、その本質を知って置くことは有益であろう。本書が、少しでもそれに接近する契機となれば望外の幸せである。

なお、「知価革命」と「知価社会」の見方について、何年間にもわたって多くの有益な御意見をいただいた日下公人、松井幹雄、佐々木康史、田辺俊彦、細川恒およびエリザベート・リュウグ・フオン・リッツベルグの各氏に心からの感謝の意を表したい。

目次

「次なる社会」の全体像を求めて——序にかえて

第一章 「新社会」の兆候 15

「高度社会」か「新社会」か 17

一 工業社会の頂点——戦後石油文明

22

高度成長に覆われた戦後世界

それは「石油」ではじまった

最も有利だった資源小国・日本

人間の「やさしい情知」

「規模の利益」の追求

工業社会の基本精神

二 「新社会」の兆候 45

「資源有限感」の定着

「軽薄短小」とポスト・モダン

「峠」を越えた石油文明

工業社会の終焉を示す諸現象

「やさしい情知」はまた働く

「知価の容器」としての物財

「知価革命」の兆候

社会構造の大変革を伴う

「知価革命」が今はじまった

第二章 文明の「犯人」探し 71

未知なる未来 73

一 文明のはじまりと変革 77

社会変化を見る視点

オアシス農業と都市国家―始代

「古代」を生み出した「農業革命」

物財に関心が集中した古代

物的生産の拡大を目的とした古代国家

古代文明の発展と限界

文明衰亡症状群

先進地域での人口減少

古代の終末——美意識の変化

中世のはじまり——人口構成の変化

古代と近代を繋いだインド「残古代」

二 文明の「犯人」とその現状 116

文明の「犯人」——技術・資源そして人口

「食えない所」で増え出した人口

「資源」の変貌と土地の砂漠化

「逆転」した技術進歩の方向

先行指標としての美術

第三章 次代は「高技術中世」か？ 137

「新社会」への胎動 139

一 反物質文化の誕生と特色 145

物質文明を否定することの「進歩」

社会的主観を重視した中世社会

後進地域の宗教が受容された理由

「モノ不足・時間余り」の文化

理知主義を排した中世

物財価値より社会主観が優先

一物多価と不等価交換

トータルメディアの世の中

中世の組織と国家

中世はなぜ終ったか

一〇世紀中国の「亜近代」

東洋「亜近代」の枯死とルネッサンス

二 今、起りつつある変化とは何か

ポスト・モダンの意味するもの

資源有限感と人口構造変化の影響

物財飽和感と非数値への欲求

技術革新の効果——時間過剰

省資源化と多様化に貢献したコンピュータ

多様化の意味と影響

情報化の問題点と将来

「モノ不足・知恵余り」の社会へ

「知価」はどこにも入り込む

労働実態の変化は見かけ以上

「貢献面産業分類」

第四章 「知価革命」と「知価社会」の本質 217

「新社会」を生む「知価革命」 219

一 「知価」の本質と振舞い 223

「知価」の本質——社会主観による一過性価値

「意志決定コスト」の重要性

使い捨てられる「知価」

寄生的客観価値から自立的主観価値へ

二「知価社会」の鳥瞰図 237

生産手段と労働力の一体化

都市中流階級を中核とした世の中

法人組織から属人的組織へ

官僚的管理能力から商人的才覚へ

等価交換原則の崩壊と職業選択の変化

「富の抽象化」

民族国家の喪失と思想圏の確立

第五章 日本の「知価革命」 255

「知価革命」ははじまった 257

一工業社会の「優等生」・日本 262

最も理想に近づいた国

今日の優等生を未来の成功者に

集団主義を生んだ日本の風土

「消化」と「拒否」を可能にした位置

絶対的正義感のない実利主義

平和が育てた官民一体思想

資源制約が育てた日本の勤勉さ

資源の豊富化で爆発した成長力

二「需要民主主義」のすすめ

デマンドクラシー
凝縮された変革の時期

西欧を襲う高齢化の危機

「知価革命」で先行するアメリカ

「知価革命」と「産業の空洞化」

評価の分かれるアメリカの現状

工業社会を維持する力の強い日本

日本の選択肢

日本文化そのものが問われる時

知価革命

工業社会が終わる
知価社会が始まる

第一章 「新社会」の兆候